

錢形平次捕物控

鉄砲汁

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、近頃金の要るやうなことはありませんか」

押詰つたある日、錢形平次のところへノツソリとやつて來たガラツ八の八五郎が、いきなり長い顎あごを撫なでながら、こんなことを言ふのです。

「何だと？　八」

平次は自分の耳を疑ふやうな調子で、長火鉢ながひばちに埋めた顔をあげました。

「ヘツく、ヘツく、さう改まつて訊かれると極りが悪いが、

實はね、親分。思ひも寄らぬ大金が轉がり込んだんで」

「大きな事を言やがる。お上の御用を承^{うけたま}はる者が、手^{てなぐさみ} 弄など

しちやならねえと、あれほどやかましく言つて居るぢやないか」

「博奕^{ばくち}なんかで儲けた金ぢやありませんよ、飛んでもない」

ガラツ八は唇^{くち}を尖^{とが}らせて、大きく手を振りました。

「それぢや、富^{とみくじ} 籤か、無盡か、——まさか拾つたんぢやあるま

いな」

「そんな氣のきかない金ぢやありませんよ、全く商法で儲^{まう}けたんで」

「何？ 商法？ 手前^{てめえ}がかい」

「馬鹿にしちやいけません、かう見えても算盤^{そろばん}の方は大したも

ので。ね、親分、安い地所でもありませんか、少し買つて置いて
もいゝが——」

「馬鹿野郎、二朱や一分で江戸の地所が買へると思つてゐるのか」
「二朱や一分なら、わざく親分の耳には入れませんよ。大晦おほみそ
日かが近いから、少しは親分も喜ばしてやりてえ——と」

「何だと？」

「怒つちやいけませんよ、ね、親分。錢形の親分は交まじりつけのね
え江戸つ子だ。不斷は滅法威勢がいゝが、宵越よひごしの錢を待ちつけ
ねえ氣き前めえだから、暮が近くなると、カラだらしがねえ。さぞ今頃
は青息吐息あをいきといきで——」

「止さねえか、八。言ひ當てられて向つ腹を立てるわけぢやねえ

が、人の面をマジマジと見乍ら、何てエ言ひ草だ」

平次も呆氣あつけに取られて、腹を立てる張合ひもありません。それほど、ガラツ八の調子は、ヌケヌケとして居りました。

「箱根ぢや穴のあいたのを立用立てたが、今日のはピカリと來ますぜ。親分、此通り」

さう言ひ乍らガラツ八は、内懷から抜いた野暮やぼな財布さいふを逆ぎやくにしごとくと、中からゾロリと出たのは、小判が七八枚に、小粒、青錢取交ひつかぜて一と掴みほど。

「野郎、何處からこれを持つて來やがつた」

平次は矢庭に中腰になると、長火鉢越しに、ガラツ八の胸むなぐら倉をギューツと押へたのです。

「あ、親分、苦しい。手荒なことをしちやいけねえ」

「何をツ、此野郎ツ。何處で盗んで來やがつた、眞つ直ぐ白状しやがれツ」

平次の拳こぶしには、半分冗談にしても、グイグイと力が入ります。

「盗んだは情けねえ、親分、こいつは間違ひもなく商法で儲けた金ですよ」

ガラツハは大袈裟おほげさに後手を突いて、斯う辯解を續けました。

「岡つ引に商法があつてたまるものか。盗んだんでなきや、何處から持つて來た。さア言へツ」

「言ふよ、言ひますよ、——言はなくて何どうするのですか、——
——おう痛てえ、喉のどがぼとけ佛ぶつがピリピリするぢやありませんか」

「喉佛の二つや三つローズにしたつて構ふことはねえ。さア言へ」
 「驚いたなア、持ちつけねえ金を持つと、のどぼとけ喉佛たゝに祟るとは知らなかつたよ」

「無駄はもう澤山だ。金を何處から出した、それを早くブチまけてしまへ」

平次が躍起やくぎとなるのも無理のないことでした。正直と馬鹿力を取得のガラツ八が、萬々一、その頃の岡つ引の習しふくわん慣に引摺り込まれて、うっかり役得でも稼かせぐ氣になつたら、貧乏と片意地を賣物にして來た、平次の顔は一ぺんに潰つぶれることでせう。

「親分、心配するのも無理はねえが、これは筋の悪い金ぢやありません。實は親分も知つて居なさるあつしの赤あかいわし鯛わしを、望み手

があつて賣つたんで」

「何？ 手前てめえの脇差を賣つた？」

「へエ——去年の暮、柳原の古道具屋を冷かし損そこねて買つた、あの脇差が、十兩になるとは思はなかつたでせう」

ガラツ八の鼻は蠢うごめせます。

「手前が二分で買つて、ひどく腐くさつて居たあの脇差が、十兩になつたといふのか」

「その通りですよ、親分。あの脇差を見た人があつて、恐ろしく錆さびびて居る上に無銘むめいだが、彦四郎貞宗さだむねに間違まちがひはない、若し間違まちがひだつたら、俺の損そんといふことにして、現金十兩で買ふがどうだ、といふ話でさ」

「フーム」

「本當に貞宗だつた日にや、十兩で賣つちや大變に損だから、一日待つて貰つて、知り合ひの刀屋を二三軒當つて見ると、——飛んでもない、そいつは備前物びぜんもので、彦四郎でも藤四郎でもある筈はねえ。その上日本一の大なまくらだから、鍋なべの尻を引つ搔くより外に役に立たない代物しろものだ。望み手があるなら、拵こしらへごと一兩で賣つても大儲おほまうけだ——と言ふんで、思ひ切つて手離しましたよ、親分」

「呆あきれ返つた野郎だ。手前はその刀屋の鑑定めきを、相手に言はなかつたのか」

「言ひましたよ。念入りに輪をかけて言つてやつたが、相手は少

しも驚かねえ——彦四郎貞宗でなきや、師匠の五郎入道正宗だらう。折角見込んだ品だから十兩が二十兩でも買つて置きてえと斯^かうだ」

「——」

「ね、親分。こんな正直な商法はないでせう」

「——」

「生れて初めて入つた十兩の金だ。一人で費^{つか}つちや冥^{みやう}利^りが悪いから、取あへず親分に見て貰ふつもりで持つて來ましたよ。ね、何んか斯^かう役に立てるやうな口はありませんか、親分、差當り拂ふ當がなかつたら、地所を買ふとか、家を建てるとか——」

ガラツ八は悉^{ことごと}く、心持でした。七八枚の小判を疊の上へ並べ

たり、重ねたり、チャリンと叩いて見たりするのです。

「止してくれ、俺はその音を聞くと蟲が起きるよ」

「へッ、まけをし負惜みが強いね、親分」

「馬鹿な野郎だ。八兩や十兩で、江戸の眞ん中に家が建つ氣で居やがる」

「家なんか建たなくなつて構やしませんよ。これ丈けありや大だいふ福餅くもちを買つても、随分出がありますぜ」

「呆れて物が言へねえ、——だがな、八。見すく大ナマクラと知つて、手前の脇差を十兩で買ふのは少し變ぢやないか」

「變ぢやありませんよ。氣に入りや、びつこうま跛馬だつて買ひますよ」

「待つてくれ、——こいつは少し臭いぞ」

錢形平次はもう一度長火鉢に顔を埋めました。暮のやり繰と違つて、こいつは何うやら思案の仕甲斐がありさうです。それを眞似するともなく、八五郎も高々と腕を拱こまぬきました。疊の上に並べた七八枚の小判も、何となく引込みのつかない姿です。

二

「八、近頃何か變なことがありやしなかつたか」
平次は改めてかう訊きました。

「變な事？」

「例へば、手前が嗅ぎ出した犯人とか、腑に落ちないと思つた事とか——」

「ありませんよ」

「何かの證據を握るとか——」

「なんにも握りやしませんよ」

ガラツ八はあまりにも屈託くつたくのない顔です。

「そんな筈はないが、——待てよ、その、手前から脇差を買つたのは誰だい」

「濱町の吉三郎、——遊び人で」

「吉三郎なら知つてゐる。賭事かけごともしない様子だが、妙に金廻りのいゝ野郎だ、——その吉三郎と何處で知合になつた」

「髪結床で、——あつしと丁度互先たがひせんといふ碁ごですよ」

「手前、濱町まで顔を剃あたりに行くのかい」

「いえ、吉三郎の野郎が町内の錨いかり床まで来るんで、——あすこの親方の剃刀かみそりがたまらねえつて」

「錨床の親方は、鬚まげはうまいが、剃刀は下手へたぢやないか」

「あつしもさう思ふんですがね」

「ところで、吉三郎は、何か手前に頼みはしなかつたか」

「いゝえ」

「少し變だな、八。脇差わきざしを賣つた時、何か言つた筈だと思ふが

——」

平次の問ひは次第に核心かくしんに觸れて行きます。

「言ひましたよ、あつしの煙草入れの根附ねつけを見て、そいつは氣に入つたから、脇差と一緒に譲ゆづつてくれ——一つて」

「あの牙彫けぼりの——」

「どうせ濱町河岸で拾つた品だから、脇差へおまけにつけましたよ」

「濱町で拾つた？」

「へエ——」

ガラツ八の話は少し變つて居ります。——『一と月ばかり前、夜釣よづりに行つた歸り、白々明けの濱町河岸に船を着けたことがありました。その時自分の船より一と足先に岸へ漕こぎ寄せた傳馬が、炭俵と米俵を二十五六俵べうをか陸へ揚げて、サツサと大川を漕こぎ戻つた

のを見てみると、足元の石垣の上に、牙彫けぼりの圓いものが一つ、危ふく水に落ちさうに引つ掛つて居た』——といふのです。

拾つて見ると、丁度手頃な根附で、眞中に穴まであいて居りますが、彫刻てうこくは怪奇を極めて、唐草模様からくさもやうと鬼のやうな縮つ毛ちぢれけの人間の首と、それから得體の知れない髯文字ひげもじがベタ一面に彫つてほあつたのを、暢氣のんきなガラツ八は、自分の煙草入れに附けて、そのまゝ腰はきに挟んで歩いて居たのでした。

「何だ、拾つたものをそのまゝ腰へブラ下げて居たのかい」
平次も少し呆れあきましたが、今に始めぬガラツ八の暢氣のんきさが、腹を立てるにしても、少し馬鹿馬鹿しかつたのです。

「どうせ馬の骨か牛の骨に細工をしたものですよ。吉三郎は三拜

九拜して持つて行つたが、あんなものが何かになりますか、親分」

「呆れた野郎だ」

平次は誰へともなく斯^かう言ひました。

「こんな事が商法になるなら、江戸中の古道具屋を漁^{あさ}つて、安物の脇差をうんと買ひ集めようかと思ふが、どんなもので」

「いゝ加減にしないか、八。吉三郎の狙つたのは、赤^{あかい}鰯^{いわし}ぢやなくて牙彫^{けぼり}の根附だつたかも知れないな——兎に角、十兩の金を持つて行つて、脇差と根附けを買ひ戻して來るがいゝ」

「三日も前のことですよ、親分」

「三日前だつて、三年前だつていゝぢやないか」

「十兩の金が、三日もあつしの手に無事で居るわけはないぢやあ

りませんか」

「仕様のねえ野郎だ、いくら費^{つか}つたんだ」

たちん

「店賃と米屋酒屋の拂ひと、煙草を一つと大福餅を十六文買つて、一兩二分と六十八文」

「いやに刻^{きざ}みやがつたな、——お静、一兩二分と六十八文、お前のところにないか」

平次はお勝手の方へ聲を掛けます。

「お前さん、——そんな事を言つたつて」

お静の聲は口の中に消えました。差^{さし}迫^{せま}る大晦^{おほみそ}日を控^{ひか}へて此

處も大世話場の眞最中だつたのです。

「氣のきかねえ事を言ふな、何のために質^{しちや}屋が暖^{のれん}簾を掛けて置く

んだ。俺の着替きがへをそつくり持つて行きや——」

「でも、あと三日で年始ねんしまは廻りぢやありませんか」

「この正月は風邪かぜを引くことにするよ」

「——」

お静は黙つて出て行つた様子でした。

「濟まねえ、親分」

ガラツ八は萎しをれ返つて、平手で額を叩いて居ります。

「こいつは罨わなだつたのさ、八。これからも氣をつけることだ、——

——なアに、お静のことなんか心配することがあるものか、こちとらの女房は、貧乏や十手には馴れつこだよ」

平次はさう言つてカラカラと笑ふのでした。

三

「た、大變だ、親分」

「又大變の大安賣が來やがつた、——何だい、八」

十兩に纏まとめた金を握つて、濱町の吉三郎のところへ驅けて行つた筈の八五郎が、半刻はんときも經たないうちに、面喰つた旋風つむじかぜのやうに舞ひ戻つて來たのでした。

「こいつは驚くぜ、親分。吉三郎が昨夜死ゆうべんだんで」

「何？」

平次もさすがに立ち上がりました。

「下手人は鐵砲汁てつぱうじるさ」

「河豚ふぐの毒にやられたのか」

大きな失望が、平次の顔をサツと翳かげらせます。

「友達が三人で河豚鍋を突つき乍ながら、一杯やらかしてゐるまではよかつたが、その晩吉三郎が毒に中つて、七轉八倒の苦しみ、夜明け前に息を引取つたといふことですよ」

「あとの二人は何うした」

「無事だつたさうで」

「誰と誰だ」

「そいつは聞かなかつた」

「行つてみよう、八。どうも俺には腑ふに落ちない事だらけだ」

平時は帶を締め直して、草履ざうりを突つかけました。

「河豚で死んだと解つても——ですかい、親分」

「河豚だつていろ／＼あるよ。後學のためだ、一緒に來るがい／＼」
二人はそのまゝ、濱町の吉三郎の家へ飛んだことは言ふ迄もありません。

吉三郎の派手な生活くらしに似ず、家は至つて地味で、贅澤ではあるが、何となく粹いきこの好みでした。附合ひがあまりなかったものか、集まつて居るのは、ほんの近所の人達が二三人。それも平次とガラツハの姿を見ると、妙に掛り合ひをおそ懼れるやうに、コソコソと姿を隠してしまひます。

「飛んだことだつたな、お神さん」

「ま、錢形の親分さん。飛んだことになつてしまひました」

女房のお由。二十五六の良い年増が、顔を擧げることさへ出来ない様子で、逆さ^{さか}屏風^{びやうぶ}の中に泣き崩^{くづ}れて居るのでした。

「昨夜の客は誰と誰だい」

平次は形ばかりの線香をあげてから、かう靜かに訊きました。

「それが、よく、わかりません」

「はて？」

「ちよいと見かけるお顔ですが——」

「年の頃は」

「二十七と五十二三」

「河豚^{ふぐ}は何處から買ったんだ」

「年を取った方のお客が持つて來ました。竹の皮包みにして、——今日漁^とつたばかりのを、知合からわけて貰つて來たが、よく洗つてあるから大丈夫だ——と言つて」

「確かに三人で食つたのだね」

「それはもう間違ひありません、大層おいしいから、私にも是非とすゝめましたが、私は河豚^{ふぐ}と雲丹^{うに}は我慢にもいけません」

「二人の客が歸つてから、毒が利^きき始めたのか」

「え」

「河豚の残りがあるだらう、生^{なま}でも煮^にたのでも構はねえ、チヨイと見せて貰はうか」

平次は妙に執^{しつ}拗^{あう}に突つ込みます。

「それが、その残つたのを、皆んな竹の皮に包んで持つて行つてしまひました」

「吉三郎は河豚をちよい／＼やるのかい」

「いえ、生れて初めてださうで、ひどく嫌がつて居りましたが、二人に笑はれて我慢に食べたやうです。でも、一と箸^{はし}二た箸食ひ始めると、——こりや飛んだうまいや、
鮫^{あなかう}鰯^{はし}そつくりだ——そんな事を言つてました」

「鮫鰯そつくりと言つたのかい」

「それから酒の味がどうも變だ、舌のせゐかしらとも言つてゐました」

女房のお由は進まない様子乍ら、問はるゝまゝに説明しました。

「三人で一つ鍋なべを突ついたのでらうな」

「え、それなのに、中あたつたのが一人は情けないぢやありませんか」

「二人が無事とどうしてわかつた」

「何處で噂を聞いたか、今朝お二人はあわてて飛んで來ました。

御近所の衆も御存じですが、何か宿が預かつたものがあるとか言つて、佛様の懷までかき廻して行きましたが。――」

「それが見付かつたのかい」

「そこまでは解りません」

話が次第にこんがらかつて、そして微妙になつて行きます。

「おや？ この脇差ですよ、親分」

ガラツ八は死骸の枕元に置いてあつた、魔ま除よけの脇差を取上げ

ました。言ふまでもなく三日前にガラツ八が吉三郎に賣つた、十兩の赤鰯丸あかいわしまるです。

「そいつには大した用事がなかつたんだよ。ところでお神さん、毒は何刻ほど経つて利き始めたんだ」

「鍋が空になると、二人のお客はすぐ歸りました。それを送つて出ると、上り框かまちで引ツくり返つた切り――」

「矢張り身體しんたいが痺しびれたんだね」

お由の聲が涙に途切れるのを、平次は慰め顔に言ふのでした。

「いえ、痺れもどうもしません。急に腹の中へ火が付いたやうだと言つて、目も當てられない苦しみをしましたが、到頭黒血はを吐はいて夜明け前に息を引取りました」

「醫者は？」

「町内の玄道げんだうさんに診みてもらひましたが、何の役にも立ちません」

お由はこれだけ言ふのが精一杯でした。平次の問ひが途切れると、吉三郎の死骸に獅し噛がみつくやうに、時々は聲を立てて泣いて居ります。

四

「親分、河豚汁ふぐじるぢや十手捕縄にも及ばないぢやありませんか」

吉三郎の家を出ると、ガラツ八はもう天下泰平たいへいの顔になつて

ゐるのですた。

「手前はさう思ふのか」

「だつて親分」

「だから幾年経つても、大物は擧^あがらねえのさ」

錢形平次は八五郎の鈍^{どんこつ}骨^{あはれ}を慫^{あはれ}むともなく、かう言ふのですた。

「へエ——、すると、何か變なこともあるんで？」

「其邊に居る町内の人達に、今朝吉三郎の家へ來た、二人連れの人相を訊くがいゝ。その邊が手繰^{たぐ}りどころだ」

「へエ——」

ガラツ八は吉三郎の家の裏口へ廻りましたが、やがて、狐につまゝれたやうな顔をして戻つて來ました。

「どうした、八？」

「變ですぜ、親分。今朝此處へやつて來て、佛様の懷までかき廻して行つたのは、三十前後の凄^{すげ}い年増と、四十恰好の浪人者らしい男ださうですよ」

「それ見るがいゝ」

「吉三郎夫妻とは餘つ程昵^{ぢつこん}懇の様子で、時々此家へ來るさうですよ」

「所、名前は？」

「そいつは解らねえ、——お由を締め上げてみませうか」

「無駄だよ、止すがいゝ。それに亭主の死骸の側で手荒なことをしちや、いかに御用でも寢^ね醒^ざめがよくねえ」

「親分は相變らず弱氣だ」

「それでいゝのさ、氣が強くて考へが淺かつた日にや、岡つ引は罪ばかり作るよ」

平次はそんな事を言ひ乍^{なが}ら、町内の本道、町野玄道を訪^{たづ}ねました。

吉三郎毒死の顛^{てん}末^{まつ}を細^{こま}々と訊くと、

「親分、あれはどうも腑^ふに落ちないよ、河豚^{ふぐ}の毒ばかりではなかつたやうだ」

「すると、何か外の毒でも盛られた様子で？」

「いや、さう言ふわけぢやない。第一あんな激しい毒藥は、江戸中の生藥屋^{きぐすりや}を搜したつてない——南蠻物^{なんばんもの}なら知らないが——」

「南蠻物？」

「矢張り河豚にして置く外はあるまい。三人で食つて一人しか中らないといふのは、河豚の外にはないことだ。鍋の中なべに外の毒が入つてゐたなら、三人が三人ともやられる筈だ」

玄道は大きな坊主頭を振るばかりです。

平次とガラツ八はもう一度吉三郎の家へ戻りました。が、お由はもう白い眼を見せるだけで、二人の問ひにもろくに答へてはくれず、親類縁者も、友達もない様子で、話を手ぐり出す工夫もありません。

「お神さん、もう一つ二つ訊きたいが、お前さんところの宗旨しゅうしは何だえ」

平次はつかぬ事をきくのですた。

「門徒もんとうですよ、今お寺様が來ますから、お宗旨の事ならそつちへ

訊いて下さい」

少し劍もほろゝです。

「江戸には親類もないんだね」

「あつたつて遠い身寄は音信不通で、附合つちやくれません。尤も長崎には亭主やどの弟が居ますが、お葬式とむらひに間に合ふわけはなし」

「そいつは氣の毒だ」

そんな事を言ひ乍ら、家の中を念入りに見ましたが、ひどく裕ゆ福ふくらしいといふ外には、何の變つたところもなかつたのです。

「吉三郎は遊び人で通つてゐたが、勝負事は好きぢやなかつたさ

うだ。立入ったことを訊くが、世過ぎは何でやって居たんだ」

平次の問ひはかなり突つ込みます。が、

「私にも解りませんよ。金の成る木でも持つて居たんでせう」

お由は空そらうそぶ嘯ささいて相手にしさうありません。

「もう一つ、三日前に八五郎が、この脇差と牙彫けぼりの根附ねつけを一つ、十兩で吉三郎に賣つたさうだ。少しわけがあつて、それを返して貰ひたいんだが」

平次は十兩の金をお由の前に押しやつて、相手の出やうを待ちました。

「勝手にその脇差を持つて行つて下さい。もつと尤も牙彫の根附なんかは知りませんよ」

「確かに持つてゐた筈だが——」

「親分も、佛様の懷が見たいんでせう。勝手にするがいゝ、馬鹿々々しい」

お由は氣が立つて居るらしく、かう言つてプイと座を立ちました。

「見ませうか、親分」

立ちかゝる八五郎。

「無駄だらう、今朝抜かれてしまつたよ、——あかいわしまる赤鰯丸なんか

持つて行つても仕様があるまい、——十兩の金さへ返しや氣が濟む。さア歸らうか、八」

平次はもう何の未練みれんげ氣もなく立ち上がるのでした。

五

その日半日、平次は何處ともなく飛んで行つてしまひました。ガラツ八は吉三郎の家を宵まで見張りましたが、町内の百萬遍まんべんの講中が來たのと、お通夜つやの小坊主が、お義理だけの經きやうをあげた外には、何の變りもありません。

フラリと平次の家へ來たのは亥刻よる少し過ぎ、食はず飲まずで見張つてゐてひどく疲つかれて居ります。

「親分は？」

「まだ戻りませんよ。入つて待つてゐて下さいな、八さん」

お静の蟠わだかまりない調子に、八五郎はいつものやうにヌツと入つて長火鉢の前に頬杖ほづえを突きました。

「何處へ廻つたらうなア」

「お支度は、八さん」

お静はそれに構はず、腹の減つてゐるらしい八五郎の顔を、少し遠くから鑑定かんていして居ります。

「親分が歸つてから御馳走になりましたせう」

ガラツ八にも矢張り遠慮はあつたのです。

「それぢや、せめて一本爛っけませう」

「へエ、——變なことがあつたもので——」

「まあ、八さん、たまにはお酒位はありますよ。——ツイ先刻、

八丁堀の旦那から、心祝ひがあるからと、わざく一升届けて下さいましたよ」

「そいつは豪儀だ、——さすがに笹野の旦那は氣が付くぜ、ヘツ、ヘツ」

八五郎はすっかり相好を崩してしまひます。

お靜はその間に、銅壺どうこに突つ込んだ徳利を拭いて、八五郎の前に据ゑた膳すの上へ、そつと載せてやりました。元は水茶屋しやくに奉公してゐたお靜ですが、さすがに夫の留守に、子分の酒の酌までしてやるのを憚はばかつたのでせう。

「濟みません」

「なアに、此方が勝手なんで、有難てえな。ト、ト、ト、散りま

す散りますと來やがる。へツ、へツ、良い色をしてゐるぜ」

グツと喉のどを鳴らし乍ら、猪口ちよくの手を胸のあたりまで持つて行つ

た八五郎。

「待ちな、八」

ガラリと格子が開きました。錢形平次が歸つて來たのです。さかづき盃

を膳へ置くかと思つた八五郎の手は、意地汚くそのまゝ唇くちへ――

「あツ」

八五郎の手をハタと打つたものがあります。盃は後ろに飛んで、

パツと胸から膝へ飛散る酒。平次の煙草たばこ入いれが飛んで來たのでし

た。

「親分」

八五郎の聲にも怒いかりがあります。

「馬鹿ツ、そいつを呑むと命がねえぞ」

「えツ」

「今路地の外まで歸けえつて來ると、變な野郎がウワウロして居るから、様子を見てゐるうちに、お靜の話を聞いてしまつたよ、――

八丁堀の旦那が、心祝ひに酒を下すつたなんて、そいつは大嘘おほうそ

だ。俺はつい先刻まで、八丁堀に居たんだから、お酒を下さるなら、そんなお話の出ないわけはねえ。心祝ひどころか、笹野の旦那

は明日は先代様の法要ほふえうで、牛込のお寺まで行かなきゃならな

いと言つて居なすつたよ」

さう言ひなが乍ら平次は、埃ほこりも叩かずに入り込んで、黙つたまゝお

静の差出す樽たるを受取つて眺めました。

「親分、そ、そいつは本當ですかえ」

「嘘だつた日にや、俺は八に申譯がねえことになる。これを見るが、いゝ、樽は町内の酒屋のだ。八丁堀から届いたのではない證據は、このますさだるし定の印で判るだらう」

「――」

八五郎もさう言はれると、口もきけません。

「危いところだ、八。そいつを一ひと猪口ちよく呑んだだけで、手前てめえは俺の身代りに、血へどを吐はいて死ぬところよ」

「――」

「だが、癪しやくにさはる野郎ぢやないか。この平次を鱈どぜうと間違へやが

つて」

「誰がこんな事をしたんで、親分」

八五郎は漸く人心地がつかしました。

「吉三郎を殺した奴だよ」

「ぢや河豚ふぐ？」

「馬鹿、河豚が酒を買つて、届けるかよ」

「さア解らねえ」

「俺も解らねえが、こいつは大變な曲者だ。退治しなきや御府内の難儀、お上の御威光ごゑくわうにも拘かはる。來い、八。今晚のうちに埒らちをあけてやる」

「へエ——」

八五郎は平次の劍幕に釣られて、モソモソ立上がりしました。

「お静、その酒は匂ひを嗅いでもならねえよ。封印をして大事にしまつて置け」

「ハイ」

言ひ捨てた平次。其足で駆け付けたのは、町内の酒屋升定ますさだでした。番頭に訊くと、

「いゝ年増でしたよ。一番良いのを一升量はからせて、小僧に持たせてやりませうと言ふと、イヤ、それには及ばない、私が持つて行かなきゃ、親切が届かないつて」

「その女は三十前後の——」

「大店おほだなの御新造といった風でした。頭巾を冠かぶつて居るので、髪

形はわかりませんが」

「有難う、飛んだ手数だった」

平次は外へ出ると、眞つ暗な師走しはすの空を仰いで、大きく息をしました。見えざる敵のしたゝかさを改めて犇ひしく々と感じた様子です。

六

「お神さん、そいつは間違ひだぜ。吉三郎は河豚ふぐで死んだんぢやねえ、立派に毒害どくがいされたんだ」

通夜の人数を追つ拂つて、八五郎に見張らせた平次は、吉三郎

の死骸を中に、お由と膝詰め談判を始めたのでした。

「まさか、親分」

お由は容易よういに信じさうありません。

「證據はいくらでもある。第一、昨夜三人で食つたのは、河豚ふぐぢやない鮫鰯あんかうなべ鍋だ、吉三郎が河豚を食つたことがないと言ふから、鮫鰯を持つて來て、河豚といふことにして食はせたんだ。鮫鰯鍋で死ぬ氣遣ひはないが、河豚なら随分三人のうち一人死ぬといふことがないではない——、彼奴等は其處を狙つたんだ」

「——」

「残つた魚を竹の皮包にして持つて歸つたのは、後で鮫鰯あんかうと判つては面白くないからだ。それから、河豚の毒なら身體しびが痺れる

筈だが、そんな事がなくて、腹の中が焼け爛たぐれるやうで、血を吐いたのは南蠻なんばん渡りわたの毒藥に違ひない。玄道さんもさう言つて居る」

「――」

「毒は、吉三郎の盃の中に入つて居たんだ。多分、ちよいと立つた時か何か、投げ込まれたんだらう。――その證據は、昨夜は三人共、盃のやり取りはしなかつた筈だ」

「えッ、そ、その通りですよ。親分。いつも差したり差されたりするのが、昨夜は最初から御家人喜六の言ひ出しで、盃のやり取りなし、うんと食つて飲まうといふことにしたやうでした」

「それ見るがいゝ。お前の配つれあひ偶は、その御家人喜六と、もう一

人の年増に殺されたんだ。今夜は俺のところへまで毒酒を持込みやがったよ。^{はふ}放つて置くと何をやり出すか解らない」

「えッ」

「解つたか、お神さん。夫の敵を討つ氣はないのか」

「畜生ッ、さうとは知らずに、——私は亭主^{やど}に口止めされたのを守つて、今まであの二人を庇^{かば}つてばかり居ました、——敵を討つて下さい。親分さん」

お由にも、漸^{やうや}く事件の全貌^{ぜんぼう}が解つた様子です。

「それにしても相手の素姓^{すじやう}が解らなくちや、敵の討ちやうがない。あの女は何だい」

「唐^{たうじん}人お勇といふ大變な女ですよ」

「三人で何かやつて居た筈だが——」

「何か大仕事をしてゐるやうでしたが、私には言つてくれません」
お由は全く何にも知らない様子でした。

「仲間はたつた三人切りか」

「子分は二三十人ある筈です」

「ね、お神さん。佛様のことを悪く言ふわけぢやないが、吉三郎はその御家人喜六と唐人お勇に荷擔かたんして大層なことをやつて居んだ」

「——」

「俺の見當では、多分拔荷あつかを扱つて居たのだと思ふ、——拔荷ろけんといふと何でもないやうだが、こいつは大變な御法度で、露顯ろけんする

と獄門にも磔^{はりつけ}刑にもなる」

「――」

「自分の榮華のために、紅毛^{こうまうじん}人に御國^{ごこく}の寶^{たから}をやつて、厄體もない贅澤な品物を買入れ、それを三倍五倍の利潤^{まうけ}で、金持や物好きな人間に賣り付けるのだから、拔荷扱ひは商人の風上にも置けねえ、屑^{くづ}のやうな人間だ」

「――」

「お國の寶の大判小判^{おほばんこばん}、あれを紅毛人は命がけで欲しがさうだ。だから、命知らずの紅毛人は、羅紗^{らしゃ}だの、ビードロだの、いろくの小間物だの、あまり生活の足しにならぬ物を持込んで、この國の大判小判と換^かへて行くのだ。長崎ではお役人の目がやか

ましいから、九州の沖で日本の船に積換^{つみか}へ、米や炭の荷に交ぜて、公方様お膝元へ持つて来るに違ひない。江戸へは諸國の荷が集まるから却^{かへ}つてわからない道理だ、——現にお前の夫の吉三郎を殺したのも、その拔荷^{ぬけに}で入つた南蠻^{なんばん}祕法^{ひはふ}の毒藥だ」

平次の舌は焰^{はのほ}のやうに燃えます。

「親分さん」

「私慾のために掟^{おきて}を破り、その上、人まで殺すやうな悪者は放つては置けない。お前の知つてることがあつたら皆な言つてくれ、許して置けない奴等だ」

「親分さん、皆んな申上げます」

「それは良い心掛だ。夫の罪亡ぼしにもなるだらう」

「私は何んにも知りません、——でも、船の入る時の合圖あひづだけは知つてゐます。——時々見張りをさせられましたから」

「有難い、それが解りや」

「——」

お由は聲を潜ひそめました。

七

その晩神田の平次の家は焼けたのです。

そればかりは、錢形平次も氣が付かなかつたのでせう。毒酒の計略けいりやくは見事に見破りましたが、それだけで油斷をしてゐると、

その夜の丑刻半頃、三方からあがつた火の手は、瞬く間に平次の長屋を焼き落し、近所の二三軒を半焼にして、漸く納まつたのでした。

風がないのと、暮の街で注意が行届いたので、これ丈で済んだのは不幸中の幸ひでしたが、困つたことは、肝腎の錢形平次が、それつ切り行方不知になつてしまつたことです。

——錢形の親分が焼け死んだとよ——

——表裏の戸口は外から閉めてあつたさうだ、お静さんが命からく逃げ出したといふぜ——

そんな噂が八方から飛びました。全く、焼跡にシヨンボリと立つてゐる、氣の抜けたやうなガラツ八の姿や、顔から腕へかけ

て、晒木綿さらしもめんで巻かれた、痛々しいお静の様子を見ると、錢形平次が死んだといふのも、満更うはさの噂ばかりではない様子です。

晝頃には八丁堀の與力笹野新三郎も來ました。江戸中の顔の良
い御用聞も、五人十人と集まつて來て、夕方には、それが二三十
人になり、打ち濕しめつた様子で、ポツポと烟けむる灰を搔かせて居りま
す。

日が暮れると、平次の遺骸を板圍いたがこひの中から運び出し戸板に
載せて、回向院ゑかうゐんに移しました。江戸中の名ある御用聞手先が二
十人、笹野新三郎と一緒に、それに従したがつたことは言ふ迄もあり
ません。

その晩の戌刻半頃、この一行は回向院の寺内に入り、其處で
通夜が営まれたのです。

同じ夜、子刻過ぎ、永代のあたりから漕ぎ上がった傳馬が一
艘、濱町河岸に來ると、船頭が舳の灯を外して、十文字に二度、
三度と振りました。

師走二十九日、漆のやうな闇の中に、その光が水を渡つて走る
と、何處からともなく河岸に集まつた人數がざつと二十人ばかり。
「變な時船が入つたものだね、お首領」

「宵のうちに、永代から合圖があつてびつくりしたよ、——今頃
入る船はない筈だが、春になつてから來るといふのが、何かの都
合で早く入つたんだらう」

さう言つた囁きが、彼方、此方に交かはされます。

「それよ、板を渡してくれ」

「おい」

「酒の荷が先か米の荷が先か」

「明日は大晦日だ、酒の荷を先にしてくれ。三河屋も、長崎屋

も來て居るぞ」

何時の間にやら、屋號を入れた提灯が二つ三つ用意されました。
くつきやう

屈強な若者達が、船から運び出す荷を、陸をかに待つて居る人足が、言葉少なに受取つて、何處ともなく姿を消します。

船の中の荷物はザツと二十七八。その全部を運び終ると、後に残つたのは、頭巾づきんを目深かぶに冠かぶつた男と女の二人でした。

「これでよし、歸らうか」

「歸りませう」

歩みを移す^{うつ}二人の前へ――、

「御用ツ」

ヌツと突つ立つたのは八五郎のガラツ八です。

「何？」

「御家人喜六、唐人お勇、神妙にせい」

パツと組付いて行くガラツ八、お勇は身をははして、トンと肩のあたりを突きました。

「ワツ」

二三歩泳いで立直るガラツ八。その後ろから、

「えいッ」

後家人喜六の一刀が闇を劈くのを、

「俺が相手だ、來いッ」

横合から飛込んだ十手が、ガツキと受止めました。

「邪魔だッ」

「拔荷ぬけにの惡事、吉三郎殺しの下手人げしゆにんまで露顯ろけんをしたぞ。觀念せ

いッ」

「何をッ」

御家人喜六は、お勇を後に庇かばつて、一刀を闇に構へます。

「御用ッ、御用ッ」

八方から、ヒタヒタと詰めよる捕方の人數。

「えッ、寄るなく、一人残らず切つて捨てるぞッ」

御家人喜六の腕は拔ばつぐん群ぐんでした。

「傳馬は此方で仕立てた偽にせもの物だ、仲間は一人残らず生捕られたぞ。神妙にお縄を頂戴せい」

先刻、船から揚げた荷物を、一つくかつ擔かいで行つた子分は、回向院に通つ夜やをすると見せかけた、江戸中の手先に、一人残らず後を跟つけられ、落着く先で縛られたとは、御家人喜六もまだ知らなかつたでせう。

「えッ、其方共に縛しばられる喜六ではない、退けく」

サツと身を翻かへすと、眼にも止まらぬ早業で、早くも二三人の捕方あさでは淺傷を負はされた様子。

「油斷するなツ」

後ろから激勵の聲を掛けたのは笹野新三郎です。

「あかり灯だツ」

誰やらの聲に應じて、何處に隠してあつたか、十幾つの御用の提灯が、一度にパツと二人の曲者を照します。

「あつしが行きませう。この野郎には家を焼かれた怨うらみがあります」
パツと飛出した美丈夫。

「平次だ、平次だ」

捕物陣は二つに割れて、その道を開きました。

「生きてゐたのか平次、いのちみやうが命冥やいば加な奴だ」

にんが苦りする御家人喜六、右手の刃やいばは、油斷なく灯にギリリとうね

ります。

「手前のすることは一々卑怯だ、我慢のならねえ野郎だ」

さう言ふ口を塞ぐやうに、喜六の刃はサツと伸びます。

「おつと危ねえ、——これでも食やがれ」

平次の右手が舉がると、夜風を剪つて錢が一枚、御家人喜六の唇へ——。

「己れツ」

僅かに刃の平で受けましたが、二枚目は強かに頬骨へ、三枚目は額へ、——眼へ——。

「野郎ツ」

ひるむ後ろから、無手とガラツ八が組付いて居たのです。

「危ねえ、八」

錢形平次は驚いて飛込みました。喜六の後に居る唐人お勇は、
^{あひくち}ヒ首を抜いて、ガラツ八の脇腹へサツと突いて出たのです。

平次は危ふくそれを突飛ばすと、お勇のヒ首は飛龍^{ひりう}の如く平次の胸へ飛んで來たのでした。それをかはして、

「女、いゝ加減にしろツ」

飛付く平次。その手を拂つてお勇の身體は、大川の寒水へ、水音高く飛込んでしまひました。

×

×

×

「變な捕物だつたね、親分」

その歸り路、柳原土手でガラツ八は斯^かう誘^{さそ}ひかけました。

「脇差を十兩に賣つたのが始まりさ。手前が感のいゝ人間で、吉三郎の心持を讀むと、こいつは危ないことだつたよ」

平次は面白さうです。

「へエ——」

「まだ判らねえのか、——手前に拔荷ぬけにを揚げる現場を見られたから、大なまくらを十兩で買つてな、手前てめえの御機嫌を取つたのさ、——見て見ぬ振りをしてくれといふ謎さ」

「なアーる」

「今頃感心する奴があるものか、十兩の元手を唯取られたやうなものだ」

「へエ——」

「あの牙彫けぼりの根附ねつけは、多令拔荷を受取る手形のやうなものだらう。吉三郎は仲間では三下さんしただが、あの牙彫の手形を手前のところから見付けて持つて行くと、急に頭領かしらの株を狙つて、拔荷の大儲おほまうけを一人占めにしようといふ大望を起したのさ」

「――」

「それと氣の付いた御家人喜六と唐人お勇が、吉三郎如きに大事の手形を取られちや叶かなはないから、鮫鰯あんかうを河豚ふぐと言つて食はせ、實は毒酒で殺して死骸から牙彫けぼりの手形を抜いたのだよ」

「さう繪解きをして貰ふと、さうでなかつたら嘘見たいで、ヘエ

――」

ガラツ八はまだ長い顎あごを撫でて居ります。

「だが、自分達の利潤もうけのために、お上の御法を破る奴は憎いね。

その上仲間を殺したり、——俺の家まで焼いたり」

「さう言へば、親分は何處へ行きなさるつもりで——」

「お静は當分里のお袋に預けたよ。——俺はな、八。當分、八五

郎の家に居候ゐさくらふときめたよ」

「そいつは有難てえ。親分を居候に置いたとあれば、あつしも肩身が廣い」

「ハツハツハツ、ハツハツ」

柳原土手の夜は白みかけて居りました。大晦日おほみそかの江戸の街は、

一瞬轉しゅんてん毎ごとに、幾百人かづつ最後の足搔あしをきの垣塙るつぼの中に、眼を

覺さまさして行くのでせう。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十三巻 焰の舞」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月5日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年12月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年5月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

鉄砲汁

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>